

令和4年度 卒業生等アンケート結果の分析

人文学部・人文社会科学研究科

教育学部・教育学研究科

医学部医学科

医学部保健学科・保健学研究科

理工学部・理工学研究科

農学生命科学部・農学生命科学研究科

地域社会研究科

教養教育開発実践センター

【人文学部】

回収率が低く標本数が少ないが、今回の回答の分析結果は以下の通り。

[II 本学在学中の教育や学生支援について]

問 4

「満足」「どちらかといえば満足」が 80%(24/30)であり、前回 R2 調査と同程度である。「不満」「どちらかといえば不満」は 0%(0/30)であり、高い満足度が得られている。

問 5

「十分」「不足していたが学習や研究はできた」が 70%(18/30)であり、R2(78%)・H30(67%)の結果と同程度であると判断される。ただし、「不十分で学習や研究がやりにくかった」「不十分で学習や研究ができなかった」という否定的な回答は 7%(2/30)であり、R2(11%)・H30(14%)の調査に比べて低くなっており、不満の程度は改善されつつあると考えられる。

問 6

「十分」「不足していたが課外活動はできた」が 60%(18/30)であり、R2(56%)・H30(54%)の調査に比べて少しずつではあるが課外活動に関する環境は改善しているように読める。ただし、「不十分で課外活動がやりにくかった」「不十分で課外活動ができなかった」という否定的な回答は 20%(6/30)であり、H30(10%)・R2(22%)の調査から改善の傾向は読み取れない。今後の改善が望まれる。

問 7

「十分」「不足していたが就職活動に問題はなかった」が 63%(19/30)であり、R2(61%)・H30(60%)の結果に比べて殆ど変化はない。ただし、「不十分で就職活動に苦労した」「不十分で就職活動ができなかった」は 10%(3/30)であり、R2(3%)・H30(6%)の結果に比べると増加している。年々変化している就職活動状況に対応できていない者が一定数存在する可能性があり、さらなる改善が望まれると考えられる。

[学生生活で感じたこと、身に付いたと思うことについて]

問 8

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が①と②で 83%(25/30)、⑤で 80%(24/30)、③と④で 70%(21/30)である。「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」という否定的な回答は①と④で 3%(1/30)、②で 10%(3/30)、③と⑤で 13%(4/30)であり、総じて肯定的な回答が多かったものの改善の余地は残されていると考えられる。

問 9

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が①で 73%(22/30)、②で 87%(26/30)、③で 77%(23/30)、④で 70%(21/30)である。「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」という否定的な回答は①と②で 7%(2/30)、③で 0%(0/30)、④で 3%(1/30)であり、総じて高い評価となっている。

問 10

“特に仕事に関する”項目①から⑤のいずれについても過半数が「非常に役に立っている」「役に立っている」という肯定的な回答をしている。なお、学部特性から技術や資格等に直結すると考えられる知識に関する項目については、“特に仕事に関すること”で「あまり役に立っていない」「役に立っていない」という回答者が①で 13%、②で 23%で相対的に多い傾向にある。ただし、知識以外の内容については、否定的な回答は相対的に低いという結果になっている。

問 11

“仕事以外の日常生活の中”での項目①から⑤のいずれについても 6 割超が「非常に役に立っている」「役に立っている」という肯定的な回答をしている。総じて肯定的な回答が高いが、今後も向上を図っていくことが望ましい。

[在学生のため、今後の教育や学生支援に必要と思われること]

問 12

いずれの選択肢で挙げられている項目も教育の充実が望まれており、今後の学部教育改善の参考にしたい。

問 13

選択肢 3「クラス担任制度」については、さらなる支援の充実を望む回答が 0 件である。クラス担任制度については、毎学期の個人面談や成績不振学生への面談実施等について継続的に取り組んでいることであり、一定程度の評価を受けているものと判断される。他の項目については、多寡はあるものの支援の充実が望まれており、引き続き改善を図りたい。

問 14~15

今後の学部教育改善の参考にしたい。

【人文社会科学研究科】

・アンケート対象者である平成 30 年度修了生 (18 人) に対し、回答数は 3 人であった (回答率 16.7%)。

問 3

就職・進学先について「4：大体希望どおり」が 2 名、「3：希望どおりではないが満足している」が 1 名であり、おおむね満足している結果となった。

問 4

教育内容全体について「5：満足だった」「4：どちらかといえば満足だった」「3：一概に言えない」が各 1 名であり、否定的な回答は見られなかった。

問 5

学習や研究に関わる施設、設備、備品について「5：十分だった」が2名、「3：一概に言えない」が1名であった。研究分野によって必要となる設備が異なるため、学生によっては不足している部分があることが推測される。

問 6

課外活動に関わる施設、設備、備品については全員が「5：十分だった」と回答しており、課外活動に関する環境が整備されていることが窺える。

問 7

就職活動への支援について「5：十分だった」「3：一概に言えない」「2：不十分で就職活動に苦労した」が各1名であった。キャリアセンターの活用を促す等、支援の充実を図る方向である。

問 8

「①総合的な『知』の基盤となる横断的基礎知識」「②専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」については全員が「5：身に付いた」「4：どちらかといえば身に付いた」と回答しており、総じて身に付いたものと思われる。一方、「③知的活動や社会生活において必要となる情報収集力、論理的思考力、コミュニケーション力等の汎用的技能」「④自己管理能力、周囲（他者）への配慮、倫理観、社会的責任等の態度・志向性」「⑤獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力」については「5：身に付いた」「3：一概に言えない」「2：どちらかと言えば身に付かなかった」に意見が分かれており、知識以外の技能や応用力の修得が今後の課題となると推測される。

問 9

教養教育（21世紀教育）科目の設問のため研究科では直接関連しない設問と思われるが、「②幅広い教養」「④基礎学力」については全員が「5：身に付いた」「4：どちらかといえば身に付いた」と回答しており、総じて身に付いたものと思われる。一方、「①横断的基礎知識」は「5：身に付いた」「4：どちらかといえば身に付いた」「3：一概に言えない」に、「③人間性・社会性」については「5：身に付いた」「3：一概に言えない」「2：どちらかと言えば身に付かなかった」にそれぞれ意見が分かれており、やや改善の余地がある。

問 10

「①「総合的な『知』の基盤となる横断的基礎知識」「③知的活動や社会生活において必要となる情報収集力、論理的思考力、コミュニケーション力等の汎用的技能」「⑤獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力」については「5：非常に役に立っている」が1名、「3：一概に言えない」が2名であり、「②専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」については「5：非常に役に立っている」が1名に「2：あまり役に立っていない」が2名、「④自己管理能力、周囲（他者）への配慮、倫理観、社会的責任等の態度・志向性」については「5：非常に役に立っている」「4：役に立っている」「2：あまり役に立っていない」にそれぞれ意見が分かれる結果となった。大学院での経験が仕事上役に立っている実感をあまり感じられていないことが示唆された。

問 11

「①「総合的な『知』の基盤となる横断的基礎知識」「⑤獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力」については「5：非常に役に立っている」「4：役に立っている」「1：役に立っていない」と意見が大きく分かれる結果となった。

「③知的活動や社会生活において必要となる情報収集力、論理的思考力、コミュニケーション力等の汎用的技能」「④自己管理能力、周囲（他者）への配慮、倫理観、社会的責任等の態度・志向性」については「5：非常に役に立っている」「4：役に立っている」「2：あまり役に立っていない」に、「②専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」については「5：非常に役に立っている」「3：一概に言えない」「2：あまり役に立っていない」にそれぞれ意見が分かれており、否定的な回答が目立った。工作上以上に、大学院での経験が日常生活の中で役に立っていることが実感できていないことが示唆された。

問 12

「1. 専門的知識・技能」「4. 論理的思考力」「10. 課題探求能力」に2名、「2. 基礎的知識・技能」「3. 情報収集力」「5. コミュニケーション力」に各1名回答があり、工作上役立つ知識・スキルに関する教育の充実が望まれていることが示唆された。

問 13

「4. 研究室・ゼミナールの活動」「5. キャリア教育」「6. インターンシップ」「10. アルバイト」に各1名回答があり、就職活動に関する支援の充実が望まれていることが示唆された。問7と関連して、支援の充実を図る方向である。

問 14

「1. 資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」「3. 必ずしも仕事・職業とは関係のないことを広く教養として学ぶ機会」「5. 学ぶ機会ということでは特に希望することはない」に各1名回答があり、現在実施している市民カレッジをはじめとした大学院生以外の方が授業を受ける機会の確保が必要と推測される。

【教育学部】

卒業生数に対する回答率の低さをかんがみれば、結果をそのまま評価することについて慎重でなければならない。あくまでも積極的に調査に協力してくださった卒業生の意見として、以下の各設問の結果について述べる。

問4

教育内容について「満足だった」「どちらかといえば満足だった」の合計は70%を超えており、「どちらかといえば不満足だった」「不満足だった」の合計が4%であったことから、概ね満足していたと考えられる。

問5

学習や研究に関わる施設、設備、備品について「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」の合計は約70%であり、前回調査（令和2年度）と比べてもほぼ同程度の結果となっている。一方で「不十分で学習や研究がやりにくかった」「不十分で学習や研究ができなかった」の合計は8%であり、前回調査の数値から減少していることから、満足を得られるまではいかないにせよ、一定程度の改善が図られていると考えられる。

問7

就職活動への支援について「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」や70%を超えている。とくに「十分だった」が60%近くにのぼっており、特に教職への就職支援を充実させた取り組みが前回調査の新カリキュラム卒業生と比べても安定的に高く評価されていることが窺える。

問8

①から⑤の各項目について、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」の合計はいずれも70%を超えており、対して「身に付かなかった」「どちらかといえば身に付かなかった」の合計は①から⑤までのすべてにおいて4%以下であった。このことから各項目について概ね良好な結果であったといえる。

ただし各項目（とりわけ③④⑤）は多様な要素を含んでおり、回答を行ううえで判断の迷いを生じる可能性があること、また各項目において10～30%程度の「一概に言えない」という回答があった点にも留意する必要がある。

問10

①から⑤の各項目について、「非常に役に立っている」「役に立っている」の合計を見ると、①③⑤は約60%、②は約70%、④は約80%となっている。全体的には概ね肯定的な評価を得ているといえるが、本学全体で取り組んでいる⑤に関わる課題探求能力や問題解決力については、さらなる向上を図る必要性を示唆する結果となっている。

なお各項目（とりわけ③④⑤）は多様な要素を含んでおり、回答を行ううえで判断の迷いを生じる可能性があること、また各項目において15～30%程度の「一概に言えない」という回答があった点にも留意する必要がある。

問 11

①から⑤の各項目について、「非常に役立っている」「役に立っている」の合計を見ると、①⑤は 50%、②③④は約 70%となっている。①横断的基礎知識と仕事以外の日常生活との関係を考えるとき、教養教育の意義や役割について再考を求める結果であるといえる。同様に⑤の相対的に見た際の肯定的な評価の低さは、大学全体の教育に関する取り組みのあり方を問うものとなっている。

当設問についても、各項目（とりわけ③④⑤）は多様な要素を含んでおり、回答を行ううえで判断の迷いを生じる可能性があること、また各項目において 20～40%程度の「一概に言えない」という回答があった点にも留意する必要がある。

問 12

複数回答のなかで、上位 3 つの選択肢は順に「1. 専門的知識・技能」「3. 情報収集力」「5. コミュニケーション力」であった（選択肢 3. と 5. は同数）。いずれも教員はもとより社会人として必要な資質であり、先輩方からの重要な示唆として、今後の教育活動の参考としたい。

問 13

複数回答のなかで、上位 3 つの選択肢は順に「4. 研究室・ゼミナールの活動」「5. キャリア教育」「1. 部活・サークル活動（スポーツ中心）」であった。今後の学生支援を行ううえでの参考としたい。

問 14

「1. 資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」の占める割合が 60% 近くなっており、次いで「必ずしも仕事・職業とは関係ないことを広く教養として学ぶ機会」が 35%となっている。前者については今後既卒者に対する研修機会の充実といった取り組みを進めていく必要性を示すものといえる。後者については、大学が教養知を提供することの意義を示唆していると考えられる。

問 15

教育学部のカリキュラムや教育実習のあり方に対する意見も含め、今後の教育活動の参考としたい。

【教育学研究科】

問 3

「希望どおり」「大体希望どおり」が約 89%であり、「希望どおりではないが満足している」が 1 名であるので、概ね入学時に希望していた進路に進めていることが伺える

問 4

「満足だった」「どちらかといえば満足だった」が約 89%であり、教育や支援については十分であったと考えられる。

問5

「満足だった」「どちらかといえば満足だった」が約89%であり学習や研究に関わる施設、設備、備品は十分であつてと考えられる。なお、1名が「不十分で学習や研究がやりにくかった」と回答しているが、専攻が明らかではないので、具体的な不満足の原因については明らかにできない。

問6

「十分だった」「不足していたが課外活動はできた」が約78%であり、概ね設備、備品については肯定的に捉えてよいと考えられる。なお、2名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問7

「十分だった」「不足していたが就職活動には問題なかった」が約78%であり、概ね就職支援については肯定的に捉えてよいと考えられる。なお、2名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問8①

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問8②

「身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問8③

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が約89%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問8④

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問8⑤

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が約89%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問9①

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問9②

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができた

たと考えられる。

問9③

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問9④

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問10①

「非常に役にたっている」「役に立っている」が約89%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問10②

「非常に役にたっている」「役に立っている」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問10③

「非常に役にたっている」「役に立っている」が約89%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問10④

「非常に役にたっている」「役に立っている」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問10⑤

「非常に役にたっている」「役に立っている」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問11①

「非常に役にたっている」「役に立っている」が約78%であり、概ね達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答、1名が「あまり役に立っていない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問11②

「非常に役にたっている」「役に立っている」が約78%であり、概ね達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答、1名が「あまり役に立っていない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 11③

「非常に役にたっている」「役に立っている」が約 78%であり、概ね達成させることができたと考えられる。なお、1 名が「一概に言えない」と回答、1 名が「あまり役に立っていない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 11④

「非常に役にたっている」「役に立っている」が約 78%であり、概ね達成させることができたと考えられる。なお、1 名が「一概に言えない」と回答、1 名が「あまり役に立っていない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 11⑤

「非常に役にたっている」「役に立っている」が約 78%であり、概ね達成させることができたと考えられる。なお、1 名が「一概に言えない」と回答、1 名が「あまり役に立っていない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 12, 13, 14, 15

現在、教育学研究科は教職実践専攻に一本化されているので、教職実践専攻の修了生が約 33%しかない本調査結果では、今後の指導への参考にすることは難しい。

【医学部医学科】

今回、調査対象となった平成 30 年度卒業生について、医学科において実施した卒業時のアンケート結果等とも比較し、以下のとおり分析した。

教育内容に関して「満足・どちらかといえば満足」と回答した割合は 83.6%(5/6)であり、満足度は概ね高いと思われる。卒業時に実施したアンケートでも「教育内容は自分の求めている知識を得るのに十分と思われましたか」の設問に対して、5段階評価で平均が 4.01 と高評価であったことから、卒業時点及び卒業後 3 年経過後においても教育内容に関する満足度は高く、この傾向は例年と大きく変わっていない。

一方で、施設・設備・備品では 50%(3/6)と低い傾向にある。これは、在学生に対して実施しているヒアリングやアンケートでも同様の結果となっており、施設・設備・備品を充実させる取組みが必要であることが伺える。

今後の必要な支援として、6 名中 3 名が「キャリア教育」を挙げており、将来的な医師の働き方や、どの分野の医師を目指すのか、医師としてのキャリアを学ぶ機会を求めているようである。キャリアプランニングの講義の実施や、青森県、関連病院とも連携した学生に対する情報提供の充実を図る必要がある。

【医学部保健学科】

・問 2、問 3 現在の職業と進路の一致

90%が「医療・福祉」職に就いており、90%が入学時に希望していた進路と一致していた。

・問 4 教育内容に関する満足度

「満足だった」「どちらかといえば満足だった」を合わせると 14 名 (70.0%) であり、ある程度満足していた。「どちらかといえば不満足だった」は 1 名 (5%) であり、問 9 の「横断的基礎知識」は「どちらかと言えば身に付かない」、「幅広い教養」は「身に付かなかった」と回答していた。問 10 の「汎用性技能」や「自己管理職、倫理観、社会的責任等の態度・志向性」も「あまり役に立っていない」と回答していた。さらに、問 15 の意見として「特定の研究室で卒業が困難であったり、国家試験の勉強をしにくかったりといったことがあったのが本当に良くなかった。」と回答しており、学修環境やスペースが不十分と考えられており、不満足の原因として考えられた。

教育内容の満足度を検討する上で、その他の設問についてみると、問 5、問 6 は、「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」は 70%以上であり、問 7 は、「十分だった」「不足していたが就職活動に問題はなかった」が 85.0%であり、就職活動への支援は問題なかったと感じていた。問 8 全般的に「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」や「非常に役に立っている」「役に立っている」のポジティブな回答が 70%以上であった。特に、問 8 の「専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」は 90.0%、問 10 の「専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」は 95.0%がポジティブな回答であったことから、医療・福祉職に就いているため役に立っていると実感していた。一方、「獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力」は 55.0%と他に比べ低い結果であった。

改善が必要な部分として、問 8、問 10、問 11 より、人間性・社会性の涵養する教育、獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力の教育は課題としてあげられた。「情報収集力」、「論理的思考力」、「コミュニケーション力」、「自己管理能力」、「社会的責任等の態度・志向性」であり、対人援助職に必要な汎用的な能力や態度・志向性に関する能力の充実を求める回答があった。その他に充実してほしいこととして、研究室・ゼミナールの活動、「キャリア教育」、「インターンシップ」など、学修環境や就職に関連した機会を希望していた。問 15 の意見より、実験器材の充実や学修スペースなどの学修環境や実習環境の充実が必要と考えられた。

・問 5 学習や教育に関わる施設・設備・備品の満足度

「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」と回答した学生は 75%であり、総計とほぼ同じ割合であった。

・問 6 課外活動の満足度

「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」と回答した学生は 70%であり、総計の 64%よりも高い満足度であった。

・問 7 就職活動への支援に関する満足度

「十分だった」「不足していたが就職活動に問題はなかった」学生は 85%であり、総計の比率に比べ高かった。「不十分で就職活動に苦労した」1名の学生は現在「無職・家事手伝い」であった。

・問 8 学生生活で知識や資質の修得状況

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」を合わせると、5項目のうち②「専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」は 90%が身に付いたと回答し、⑤「獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力」は 55%であり、他に比べ低いうえに、総計の 74%に比べても低かった。その他の項目①、③、④は 70%が身に付いたと回答していた。

・問 9 教養科目(21世紀教育)科目、の修得状況

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」を合わせて、①「横断的基礎知識」65%、②「幅広い教養」65%、③「人間性・社会性」55%、④「基礎学力」60%であり、いずれも総計の比率に比べ低く、特に人間性・社会性の涵養する教育は総計の比率も他に比べ低いことから、教育の充実が必要である。

・問 10 仕事に関わることで、弘前大学で学んだことや大学での経験の役立ち状況

「非常に役立っている」「役立っている」をみると、①「総合的な「知」の基盤となる横断的基礎知識」65%、②「専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」95%、③「知的活動や社会生活において必要となる情報収集力、論理的思考力、コミュニケーション力等の汎用性技術」75%、④「自己管理能力、周囲(他者)への配慮、倫理観、社会的責任等の態度・志向性」80%、⑤「獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力」75%であり、いずれも総計の比率に比べ高い割合であった。特に②「専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」は高く、専門的知識が仕事に役立っていた。

・問 11 仕事以外の日常生活の中で、弘前大学で学んだことや大学での経験の役立ち状況

「非常に役立っている」「役立っている」をみると、①「総合的な「知」の基盤となる横断的基礎知識」55%、②「専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」75%、③「知的活動や社会生活において必要となる情報収集力、論理的思考力、コミュニケーション力等の汎用性技術」65%、④「自己管理能力、周囲(他者)への配慮、倫理観、社会的責任等の態度・志向性」70%、⑤「獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力」50%であり、いずれも総計の比率同様の割合であった。

役立っている割合が、問 10 では高いが問 11 ではあまり高くなかったことから、仕事である「医療・福祉」に関する学びは役立っていると感じているが、日常生活ではあまり役立っていると感じていないと考えられる。

問 8、問 10、問 11 の結果より、人間性・社会性の涵養する教育、獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力の教育の充実は課題であると考えられる。

・問 12 在学生のため支援が必要と思われること

半数以上が必要と回答したものは、「情報収集力」、「論理的思考力」、「コミュニケーション力」、「自己管理力」、「社会的責任等の態度・志向性」であり、対人援助職に必要な汎用的な能力や態度・志向性に関する能力の充実を求める内容であった。

・問 13 支援を充実させることが望ましい項目

上位にあげられたものは、「研究室・ゼミナールの活動」、「キャリア教育」、「インターンシップ」であり、総計の同様の傾向であり、学修環境や就職に関連した機会を希望していた。

・問 14 今後本学で学ぶ時の機会

人数が多かったのは、「資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」、「必ずしも仕事・職業とは関係のないことを広く教養として学ぶ機会」があげられた。

・問 15 大学の教育や学生支援サービス向上のための意見

意見として、以下の内容があげられた。

- ・実習に行った際に、どこまでやっていいのか施設側が分かっていないことが多く、学生が不利を被ることがあった。受け入れ施設と大学の間で密に情報共有をしてほしい。
- ・特定の研究室で卒業が困難であったり、国家試験の勉強をしにくかったりといったことがあったのが本当に良くなかった。
- ・実験等のグループで取り組む時、役割分担を話し合うことも大切ですが、物が限られているので一部の実験過程を行えないことがありました。大学には実験で使う物を充実させて頂きたいと思えます。

以上のように、実験器材の充実や学習スペースなどの学修環境や実習環境の充実を求める内容であった。

【保健学研究科】

(回答数が少ないため、博士前・後期課程合わせて解析)

問 1 : アンケートの回収率が低く、十分な解析を行うことができない。保健学研究科は 4% である。今後は回収率を高めるために適切な方法を用いる必要がある。

問 2 : 7 名中 6 名が教育・医療関係であった。おそらく、教育関係も医療職育成のための大学等に所属しているものとする。

問 3 : 7 名中 4 名が希望通りであったと回答している一方、3 名が希望通りでないと答えている。大学院修学時の希望がどのようであったかと合わせて解析が必要である。

問 4 : 7 名中 3 名が「満足、どちらかといえば満足」であったが、4 名は良い評価となっていない。入学前後と修学中における意向とともに、修了時アンケートの結果を踏まえて、満足できなかった点を探ることが不可欠である。

問5：7名中2名は十分であったと答えているが、5名は不十分であったと回答されている。これまでも学習スペースやパソコン、プリンター設備等の改善に関する意見が挙がっているようなので、検討したい。また、各研究室における設備については不明である。

問6：7名中1名のみが十分と答えているが、6名は不十分であったと回答されている。まずは、各課外活動がどのように行われているかを把握し、その後必要な対応を検討する必要がある。

問7：7名中1名のみが十分と答えているが、6名は不十分であったと回答されている。保健学研究は社会人大学生も多いが、その後のキャリアパスをどのように考えているかなどの声掛け、フォローが必要である。

IV

問12：7名中、半数（4名）以上だったのは、コミュニケーション力が最も多く（6名）、次いで4名が情報収集能力と論理的思考力を選択した。今後はこれらの意見をもとにカリキュラムの編成を検討したい。

問13：最も多かったのは、研究室・ゼミナールの活動、キャリア教育であった。研究室・ゼミナールの活動およびキャリア教育については、どのような支援を充実させるべきか、さらなる検証が必要である。また、海外留学の支援についても検討したい。

問14：最も多かったのは「資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」であった。これは研究科の特徴上、予想され得る結果だった。今後は学び直しも兼ねて、更に専門的な資格等の学びの場の提供を検討したい。

問15：「遠隔授業をさらなる充実を期待している」とのコメントがあった。社会人大学生も多いことから、遠隔で対応できる設備の充実を進めている。科目についても遠隔で対応できるよう検討する。

【理工学部・理工学研究科】

問1 回答件数

学部卒が 20 件，院卒が 16 件であった。回収率の向上が望まれる。

問2 回答者の職業？

学部卒；情報通信業が最も多く，次いで製造業，公務員等々となっている。

院卒；製造業が最も多い。

問3 入学時の希望通りの進路に進んでいるかどうか？

（左側の数値は学部卒回答数割合，右側の数値は院卒回答数割合を示す。以下，特に断りのない限り同様）

「希望どおり」30%，37.5%

「大体希望どおり」35%，25.0%

「希望通りではないが満足している」30%，31.3%

「希望通りではなく満足していない」0%，0%

「希望する進路がなかった」5%，6.2%

大方が肯定的回答となっている。

問4 教育内容は全体的に満足であったか？

「満足だった」45%，31.3%

「どちらかといえば満足だった」25%，50%

「一概に言えない」25%，18.7%

「どちらかといえば不満足だった」15%，0%

「不満足だった」0%，0%

学部卒では肯定的回答が7割，大学院卒では8割を超えた。

問5 学習や研究に関わる施設などは十分であったか？

「十分だった」40%，43.8%

「不足していたが学習や研究はできた」30%，12.5%

「一概に言えない」15%，25.0%

「不十分で学習や研究がやりにくかった」10%，12.5%

「不十分で学習や研究ができなかった」5%，6.2%

学部卒，院卒ともに「満足だった」とする回答数が4割程度で最も多い一方で，「一概には言えない」や「不十分」とする否定的回答の合計が，学部卒の場合3割，院卒の場合4割強となっている。

問 6 課外活動に関わる施設などは十分であったか？

- 「十分だった」 30%, 43.8%
- 「不足していたが課外活動はできた」 30%, 12.5%
- 「一概に言えない」 30%, 25.0%
- 「不十分で課外活動がやりにくかった」 5%, 12.5%
- 「不十分で課外活動ができなかった」 5%, 6.2%

「十分だった」とする回答が学部卒・院卒で 3~4 割程度あった一方で、「一概には言えない」や「不十分」とする回答の割合も 4 割程度存在する。

問 7 就職支援に関する支援は十分であったか？

- 「十分だった」 55%, 25.0%
- 「不足していたが就職活動に問題はなかった」 20%, 25.0%
- 「一概に言えない」 20%, 37.5%
- 「不十分で就職活動に苦労した」 5%, 12.5%
- 「就職活動ができなかった」 0%, 0%

学部卒では肯定的回答が 7 割を超えている。院卒では肯定的回答が 5 割であり、学部卒と比較して低めの割合となっている。

問 8 学位授与方針の中で掲げられている知識や資質がどれだけ身についたか？

- 「身についた」 45%, 38.8%
- 「どちらかといえば身についた」 43%, 45.0%
- 「一概に言えない」 10%, 7.5%
- 「どちらかといえば身につかなかった」 2%, 8.7%
- 「身につかなかった」 0%, 0%

学部卒、院卒ともに肯定的な回答が 8 割を超えている。

問 9 教養教育科目で到達目標としている知識・学力は身についたか？

- 「身についた」 22.5%, 28.1%
- 「どちらかといえば身についた」 50.0%, 48.4%
- 「一概に言えない」 20.0%, 17.2%
- 「どちらかといえば身につかなかった」 5.0%, 6.3%
- 「身につかなかった」 2.5%, 0%

学部卒、院卒ともに肯定的な回答が 7 割を超えている。

問 10 大学で学んだことや経験が仕事で役に立っているか？

「非常に役に立っている」 21%, 28.7%
「役に立っている」 64%, 51.2%
「一概に言えない」 10%, 7.5%
「あまり役に立っていない」 2%, 3.7%
「役に立っていない」 3%, 8.9%

学部卒・院卒ともに肯定的回答が 8 割程度となっている。

問 11 大学で学んだことや経験が仕事以外で役に立っているか？

「非常に役に立っている」 22%, 7.5%
「役に立っている」 57%, 58.8%
「一概に言えない」 18%, 26.2%
「あまり役に立っていない」 1%, 6.3%
「役に立っていない」 2%, 1.2%

学部卒, 大学院卒ともに「役に立っている」とする回答が 6 割程度と最も多くなっている。次に多い回答が学部卒の場合「非常に役に立っている」、院卒の場合「一概に言えない」となっており、学部卒の回答の方が院卒の回答よりも肯定的である。

問 12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいか（複数回答可）？

学部卒 ; 1 位「情報収集力」 13.4%, 2 位「コミュカ」 12.6%, 3 位「問題解決力」 11.5%
院卒 ; 1 位「問題解決力」 13.9%, 2 位「論理的思考力」, 「コミュカ」 12.5%

学部卒, 院卒ともにコミュニケーション能力を育成する教育の充実を望む声が 2 位となっている。院卒の方がより思考力や判断力を育成する教育の充実を望む傾向が強いように見受けられる。

問 13 問 12 以外のどの分野の支援を今後充実させればいいのか（複数回答可）？

学部卒 ; 1 位「研究室・ゼミ活動」 25.9%, 2 位「キャリア教育」 20.7%, 「インターンシップ」 12.1%
院卒 ; 1 位「研究室・ゼミ活動」 31.7%, 「部活等（文化・研究）」, 「インターンシップ」, 「海外留学」 12.2%

学部卒・院卒ともに研究室・ゼミ活動の充実を望む声が最も多い。

問 14 再び本学で学ぶとしたら、どのような機会にしたいか？

学部；1位「資格修得のための特定の技術的・専門的知識」65%，

2位「必ずしも仕事とは関係のないことを教養として学ぶ」35%

研究科；1位「資格修得のための特定の技術的・専門的知識」50%，

2位「必ずしも仕事とは関係のないことを教養として学ぶ」43.8%，

3位「技術的知識ではない広い教養を職業人としての実力をつけるために学ぶ」6.2%

学部卒・院卒ともに「資格修得のための特定の技術的・専門的知識」、「必ずしも仕事とは関係のないことを教養として学ぶ」とする回答が多い。

【農学生命科学部・農学生命科学研究科】

就職し日々の業務で忙しい中、卒業後に弘前大学の調査に協力いただいた卒業生・修了生の方々には厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

今回の回答者の集計結果からは、総じて当学部・研究科での教育について大きな問題がないこと、就職支援の充実と、汎用的技能や問題解決力をより身に付けさせる工夫が望まれることがうかがえた。以下では、学部 19 件、研究科 4 件を区別せず 23 件での傾向を記述する。

問 3 就職・進学先について満足していない回答が 22%、問 7 就職活動への支援で不十分側の回答が 13%とやや高めであるものの、問 4 教育内容で不満足側の回答は 4%、問 6 学習・研究環境で支障がある側の回答は皆無である。

問 8 身に付いたことに関して否定的側の回答率が高いのは、汎用的技能 17%、問題解決力 13%で、横断的知識と専門的知識はともに 9%、態度・志向性は皆無である。問 9 教養教育の否定側回答率は、人間性・社会性 17%と基礎学力 13%がやや高く、幅広い教養 7%、横断的基礎知識 4%である。問 10 仕事への反映では、専門的知識が 26%と高く進路での不満足側の回答に対応し、また横断的基礎知識 17%、汎用的技能、態度・志向性、問題解決力が 13%とやや高めである。問 11 日常生活への反映でも横断的基礎知識、専門的知識、汎用的技能が 22%、問題解決力 17%、態度・志向性が 13%と高めである。

問 12 今後の教育の充実に関しては、多い順に基礎的知識・技能 65%、問題解決力 57%、専門的知識・技能、情報収集力、論理的思考力、自己管理力が 48%、課題探求能力 43%であり、身に付いたことで否定的回答率が高い内容を反映している。問 13 の今後の教育以外での充実に関しては、多い順に研究室活動 65%、インターンシップ 48%、キャリア教育 35%となっている。問 14 学び直しに関しては、多い順に専門的知識が 52%、仕事と関係ない広い教養 26%である。

【地域社会研究科】

地域社会研究科の回答者が1名のみであり、研究科としての分析はできないが、大学で学んだことや経験等について概ね良い評価となっている。施設、設備等については十分だったとは一概に言えないとの回答を得ており、研究科として不足しているところがあったかも知れない。そのため今年度、机や研究用PC等設備の更新や教育・研究用書籍の設置を行うなど本研究科の院生室の整備を進め、施設、設備環境の向上に努めているところである。

【教養教育開発実践センター】

問9

全卒業生に対して 10%程度の回答率ということであれば、そこに表れた傾向を安易に一般化すべきではない。このことを前提としたうえで回答結果を見ると、①横断的基礎知識、②幅広い教養、③人間性・社会性、④基礎学力の各項目について、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」の合計は①②④については 70%台、③については 60%台であった。これらは直接の比較対象となる令和2年度の卒業生アンケート（旧カリキュラム卒業生）との対比において①②④はいずれも 10%程度高く、③はほぼ同じとなっている。解釈には一定の制約がともなうものの、この結果から、新カリキュラムの導入による教育効果が得られたと見ることができる。